

率（50%海水配合餌料区における平均値80%）を加えた値が、110%となることにより両方の餌料を効率的に利用されたものと考えられる。しかし、前述のとうり併用区では配合餌料の給餌量による違いを考慮していないためこれについては更に検討すべきである。

放養密度については、今回検討されていないが、植物プランクトンのよく繁殖した水を注入すれば、一般に放養尾数も生産量も多くなるとされているので、今後検討する必要がある。

以上のように、植物プランクトンの餌料として効果が大きいということは、明らかとなってきたが、このように大量の植物プランクトンを供給して養成する場合には夜間の酸欠が考えられるので充分の曝気を施す必要がある。

#### 4-3 給餌方式による成長

給餌方式による養成は給餌が実験期間中安定に行なわれた（3%/Bodyweight/day）ことにより成長は淡水、50%海水共に順調な増重が得られた。成長は50%海水において淡水に優っていたが淡水区の供試魚の中には60日目の測定の際に、口腔内哺育中の雌が存在し、他の雌についてもその可能性があることから、ここに現われた成長の差は雌の成熟産卵による成長の遅れと考えられ、両者の差は測定値より少ないと予想される。50%海水では雌の産卵哺育が行なわれなかったことで増重が大きくなったものと思われる。

従って、成長が50%海水の塩分濃度に阻害されないと考えられることより、流速によって産卵抑制し、成長が緩慢になることを防ぐ方法、その他の繁殖抑制法同様に海水を繁殖抑制のために用いて、成長を良好にすることが望められると思われる。

表 4-3 給餌方式による成長

給餌方式	飼育水	成長率 (%)	備考
1	淡水	80	
2	50%海水	81	
3	淡水	80	
4	50%海水	82	
5	淡水	80	